

## 魏晉南北朝における華南（湖南省・江西省）墳墓の編年的分析

戴 俊 英

はじめに

魏晉南北朝期における華南墳墓の編年的分析を行う際の諸指標を、先行諸研究の成果をふまえながら、整理することが課題である。それは、当該諸墳墓の特徴とそれらの歴史的意味を明らかにするための基本的かつ必須の作業である。

紙幅の関係で、本稿は、華南のなかでも湖南省と江西省の地域を対象とし、浙江省と福建省については稿を改める。

### 一、華南墳墓における墳墓編年研究の現状と課題

華南は、南京以南の長江下流域（浙江・福建）と、武漢以南の長江中流域（湖南・江西）とに分けて考えることが出来る。従来、中国の考古学者は各自の個人的関心視角から華南の墓葬について検討してきた。まず、それらの報告について簡単に紹介する。

#### 1. 先行研究者による華南墳墓の編年

- ① 葉驍軍氏の「五期説」（葉 1994）：墳墓の形状・副葬品の種類・器物（副葬品）の器種構成を基に中国南部の墳墓群を長江中下流域・閩広地域・西南地域に三分し、それぞれの地域に見られる特徴を指摘している。ここでは、長江中・下流域に関するものを取り上げる。なお、長江中・下流域とは言うものの、取り上げられるのは、江蘇と浙江の資料が中心であり、湖南・湖北・江西についての言及は参考程度に留まっている〔文献1〕。

長江中・下流域における墓葬の画期

第一期：後漢末から孫呉の初め（3世紀の初頭から中葉まで）

孫呉の黄武六年（277年）の銘がある地券が、武昌の墳墓から出土し、それが年代決定の決め手となっている。

第二期：孫呉の中期以降、東晋の初め（3世紀中葉から4世紀初頭まで）

南京の墳墓から出土した孫呉の赤烏十四年（251年）銘をもつ青磁製の“虎子”を上限とし、南京の象坊村で出土した東晋の太寧二年（319年）の紀年を有する磚を下限とする。この外にも孫呉の墳墓で甘露元年（265年）銘のある青磁灯の出土例があり、また、これらとは別の孫呉墓2基と西晋墓4基からも紀年磚・鉛製地券が出土している。

第三期：東晋期（4世紀）

南京老虎山顔氏象山王氏墓群を典型とする。

第四期：劉宋・南齐期（5世紀）

紀年の入った磚が多く出土している。特に、武漢出土の資料は重要な時期区分要素である。

第五期：蕭梁・陳期（6世紀）

武漢の出土資料が重要な時期区分要素である。

- ② 馮普仁氏の「二期説」（馮 1985）：馮普仁氏は墓葬の類型と流行の年代及び規模によって南朝の墳墓を二期に区分している〔文献2〕。

第一期：劉宋・南齐期（5世紀）

湖南の長沙地区のものは墓壁が弧を描いて凸出した（“弧壁”）凸字形墓で、福建・浙江地区では刀形墓が主であるが、江西地区では長方形磚室墓が盛んに築かれている。墓磚の側面には網錢紋・卷草紋・同心円紋・菱形紋・連花紋・魚紋などの紋様が施されている。

第二期：蕭梁・陳期（6世紀）

福建地区は刀形墓から凸字形墓に変わる。浙江地区の刀形墓はさらに複雑になって、棺室付きの刀形墓と前・後室付きの刀形墓が出現した。湖南・江西の両地区では長方形墓が引き続き造られているが、墓室内に設けられた磚柱は以前より多くなっている。墓磚は銅錢・同心円・方格紋など紋様磚の外に、連花・忍冬・寶相花・人物像・四神・飛天・怪獸などを描いた画像磚が盛んに用いられている。

- ③ 蔣贊初氏の「長江中流域の四期説」（蔣 1984）。蔣氏は、六朝墳墓の構造と副葬品の変遷によって、長江中流域（湖南・湖北・江西）の墳墓を四つの時期に区分した〔文献3〕。

第一期：後漢から孫呉まで

第二期：西晋から東晋の初め

第三期：東晋の中・後期

第四期：南朝時代

第一期：大型墓には、甬道が附いた横前堂後室墓がよく見られる。これは、前堂に一つもしくは二つの耳室が附いたものである。墓頂は券頂（アーチ型墓頂＝“弧頂”）が大勢を占めるが、穹窿頂（ドーム型）も出現している。前堂に祭台を、後室に棺床を築く墳墓もある。排水溝はあまり無い。中型墓は短い甬道が附いた単室券頂墓の類型に属し、凸形単室墓と刀形単室墓とから成る。長方形券頂の双室並列墓もある。墓頂は券頂が多い。墓室に、祭台・棺床・排水溝などの内部施設が見られる例は皆無に近い。小型墓は甬道の附かない長方形単室墓である。墓頂は券頂と疊洪頂があり、祭台・棺床・排水溝は見られない。

第二期：全て中型墓で、短い甬道が附いた単室墓、即ち凸形単室墓であり、墓壁は外に凸の弧壁である。墓頂は券頂が多い。墓室に棺床が築かれたものは少ない。排水施設は方形の排水穴である。

第三期：凸形単室券頂墓が主であるが、中型墓でも小ぶりのものと、小型墓には刀形単室墓と甬道の無い長方形単室墓が見られる。墓壁は外に凸の弧壁である。磚の祭台・棺床・排水溝などが墓室内に盛んに築かれるようになる。

第四期：すべて大・中型墓であり、凸形単室・券頂が主流である。墓壁は外に凸の弧壁で、墓室には棺床と排水溝が築かれ、劉宋になると墓壁に小龕と直櫺窓が築かれるようになる。墓磚は連瓣紋・網格紋・纏枝花葉紋などの紋様磚である。

④ 楊弘氏は、湖南の長沙地区で1952-1958年に発掘された西晋墓について述べている〔文献4〕。

楊氏は墓群を大型と小型に二分しているが、それらの編年はなされていない。

⑤ 姚仲源氏は浙江にある六朝の古墓について概説している。その際、築造年次によって墳墓を四つの時期に区分した〔文献5〕。

第一期：孫呉から西晋

第二期：東晋

第三期：劉宋

第四期：南齊から陳

第一期：墳墓の類型には凸字形券頂磚槨墓が多く、また少数ではあるが、片耳室付きの凸字形券頂墓や刀形券頂墓もある。さらに特異なものとして、安吉三官郷の“干”字形攢尖頂磚槨墓と杭州金門檻にある前・中・後三室の前・中室間に両耳室を附した券頂磚槨墓が、それぞれ1基ある。副葬品は多く玄室の前半部と甬道に置かれ、磁器が中心である。内訳は、壺・罐・碗・盆・耳杯・燻炉・硯台・釜・“水井”・豚檻などである。

第二期：全体として墳墓は西晋より小さくなり、凸字形券頂磚墓が主となっている。しかしながら、仔細に見ると地域間において顕著な差異が認められる。黄岩秀嶺水庫において長方形券頂磚墓が墳墓群の半分以上を占め、金華竹馬館・瑞安桐溪蘆蒲で見られるものがすべて刀形券頂磚墓であるのに対して、諸暨牌頭においては玄室に棺床が築かれたものが出現しているのである。排水路をもつものは少数で、墓壁には盛んに龕が築かれている。副葬品は、壺・罐・碗・盆・耳杯・燻炉・硯台・“虎子”などである。

第三期：墳墓類型の分布から、地域間に著しい差異が看取れる。瑞安桐溪蘆蒲において刀形券頂磚墓が7基、黄岩秀嶺水庫で長方形券頂磚墓が認められるが、両地域ともに凸字形券頂磚墓は見当たらない。また、玄室の後壁には龕が築かれるようになる。副葬品は、壺・罐・碗・皿

である。

第四期：刀形券頂磚墓が2基、長方形竪穴式磚墓が1基、凸字形券頂磚墓が1基ある。それ以外はすべて長方形券頂磚墓である。その墓底は細長く、墓頂は低い。副葬品は、壺・罐・碗・盤・鉢である。

⑥ 曾凡氏は福建六朝磚室墓の形態について論じている〔文献6〕。

曾氏は福建六朝磚室墓をA・B・Cの三つに分類した。即ち、A型：長方形単室磚墓。

B型：甬道が附いた長方形単室磚墓。C型：多室磚墓。但し、A・B・Cの何れについても編年はなされていない。

⑦ 林忠干氏は墳墓の築造年次によって福建の六朝墓を論じている〔文献7〕。

西晋墓：大型墓が2基あり、そのうち1基は双凸形墓で、もう1基は刀形墓である。中・小型墓は全て刀形墓か凸字形墓である。玄室に祭台は築かれていない。墓室の後壁と左右の側壁に方形の燈龕が設けられている墓もある。墓磚の両面に蟬形・蕉葉・網格・縄紋、側面に銭・蕉葉・米字・網格・同心円などの幾何紋様がある。副葬品は10点くらいあり、青磁製品が主である。

東晋墓：大型墓はなく、すべて中・小型墓である。墳墓の類型は凸字形・刀形・長方形である。玄室の前に祭台を築いており、墓壁には小龕が造られている。墓磚の表面は繩席紋と網格紋で、側面は銭・蕉葉・米字・同心円・獸面・魚龍などの紋様で飾られている。

南朝墓：大型墓が3基あり、すべて十字形墓である。中・小型墓には刀形墓が多い。次に凸字形墓が多く、長方形墓と多室墓は少ない。墓壁を固めて弧頂を支えるために、墓室の四隅に磚で柱を築いている。甬道から玄室の後半部までは階段状で徐々に高まり、最高部位が棺台となって、自然に排水できるようになっている。墓室の前半部に祭台は築かれていない。墓磚の側面には蓮花・纏枝・卷草紋、青龍・白虎・朱雀・玄武の四神、僧侶・忍冬・宝相・宝瓶・飛天・飛鶴など仏教説話を想起させる紋様で飾られている。

## 2. 先行研究における問題点

① 葉驍軍氏は、規模によって墳墓を分類している。墳墓の規模は身分・地位など階層による較差を表し得るが、経年変化の段階や地域間の差異が反映されているとは必ずしも言えず、この分類方法では不十分であると思われる。また閩広地区の墳墓については、事例そのものが省略されているため、具体的なことは一切わからない。

② 馮普仁氏は、南朝磚室墓の凸字形墓を規模によって四型式に区分しているが、規模のみによって墳墓階梯を決定していることそれ自体に問題があるのは①と同様である。また、凸字形磚室墓にお

ける直壁から弧壁への変化や墓磚紋様の違いによる編年は十分とは言えない。全体として事例に乏しく、六朝墳墓の時代性や地域性を総合的に検討しているとは言い難い。

- ③ 蔣賛初氏は、長江中流域（湖南・湖北・江西）の六朝墓を四期に区分しているが、墳墓の規模と築造年次による氏の編年案は墓室の類型と構造の変化を明らかにし得ていない。
- ④ 楊泓氏は、1952-1958年に発掘された湖南長沙地区の西晋墓について述べているが、華南地区の南朝墳墓における内部構成についての全体的な見通し・具体例に基づいた構成要素の確定・時間的変化の動向・地域的多様性などについて、あまり研究が進んでいるとは言えない。
- ⑤ 姚仲源氏は、浙江にある六朝の古墓について概説しており、林忠干氏は福建六朝墓を論じている。その際、築造年次によって墳墓の時期を区分・特定しているが、類型・編年ともに明らかになっていない。
- ⑥ 曾凡氏は、福建六朝磚室墓をA・B・Cに三分し、単室墓と多室墓に類別した。双室墓を多室墓に組み込んでいるのは煩雑で不適切な分類であると思われる。

## 二、筆者における華南墳墓の編年

墳墓はさまざまな形態に変化して行くが、どのような段階を踏んでどのように変化して来たか、地域が異なることによる形態・構造上の特徴が何で、時間的変化の指標となるものがどのような要素であるのか、個々の性格と相互の繋がり方を基に墳墓・葬制の全体像を把握し、その上で当時における社会の実像と人々の意識・行為を探り、変化の持つ意味を検討すべきであると考えます。

筆者は先行研究者が発掘、調査した報告や資料を整理、分析し、墓室の平面類型・墓頂の形状・壁体の様相を指標として、魏晋南北朝の華南墳墓を地域・時期ともに細分して考察した。なお、本稿のデータを整理する際に用いた中国の省は現在の行政区画であり、当時の地域区分とは異なっているので、古代における政治勢力の活動範囲や文化的な共通性を指標として各省をより小さな地域に区分した上で、時期もまた細分して検討する。

### (一) 湖南省

墓室の平面類型と内部構造を指標として、これまでに発掘された墳墓群を、長沙及びその周辺地域とそれ以外の地域とに二分した。

## 1. 湖南省の長沙及びその周辺地域

この地域には総計49基の墳墓がある（附表の湖南省1-49）。西晋の太康八年（287年）から陳末（589年）までの時期を通じて、多室・双室・単室を問わず様々な種類の墳墓があるが、それらは全て横穴式磚室墓か豎穴式土坑墓である。これらを、墓室の平面類型と内部構造によって、二期に区分した。

一期：西晋の太康八年（287年）から東晋（420年）まで

二期：劉宋（421年）から陳末（589年）まで

### ① 一期：西晋の太康八年（287年）から東晋（420年）まで

この時期のものは全部で33基である（附表の湖南省1-33）。墳墓種類の在り方は多様で、多室・双室・単室のすべてが揃っている。その内訳は、甬道付きの横穴式磚室墓が27基で最も多く、他には、斜めに下がった羨道（斜坡羨道）を有する甬道付き横穴式磚室墓の安郷西晋宣成公劉弘墓〔文献8〕（附表の湖南省3）、階段状の羨道を有する甬道付き横穴式磚室墓の長沙桂花園東晋昇平五年墓（361年）〔文献9〕（附表の湖南省30）、甬道の付かない横穴式磚室墓の長沙南郊野坡墓3〔文献10〕（附表の湖南省33）が、それぞれ1基ずつある。また、豎穴式磚室墓は、長沙晋墓（M18・M19・M20）〔文献11〕（附表の湖南省27-29）の3基だけである。墓壁は弧壁のものが多く、23基であるが、直壁墓も9基ある。弧頂・穹窿頂・前穹後穹などの墓頂があり、そのうち弧頂が11基、穹窿頂が3基、前穹後穹が3基、残りが1基、不明は15基である。どれも紋様磚を用いた裝飾墓である。

多室墓が2基、双室墓が3基、単室墓が28基で、単室墓が一期における墳墓の総数において圧倒的多数を占めている。多室墓には、弧壁方凸形単室に両耳室が附いている長沙晋墓（M22）〔文献11〕（附表の湖南省8）と弧壁方凸形単室の甬道に両耳室が附いている長沙晋墓（M24）〔文献11〕（附表の湖南省9）があり、双室墓には、弧壁方双凸形室縦列の長沙晋墓（M23）〔文献11〕（附表の湖南省10）、長方形双室縦列の長沙晋墓（M25）〔文献11〕（附表の湖南省11）、弧壁長方双凸形室縦列の長沙晋墓（M26）〔文献11〕（附表の湖南省12）がある。単室墓28基のうち弧壁長方凸形単室が18基、長方凸形単室が4基、弧壁方凸形単室が1基、長方形単室が4基、長方台形単室が1基である。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が長方形で、しかも細長いものが多い。それらはともに、地面に大きな豎穴を掘ってから磚で甬道・玄室・耳室を築いており、斜めに下がった長大な羨道を持ち、横砌式で築かれた甬道には、木／石門は設けられていない。

甬道は大体1-2mであるが、2m以上のものも3基あり、最長のものは2.5mになる。また、1m以下のものは1基だけで、0.7mである。磚で棺床を築いたものが15基あり、棺床の幅が墓室と同じものと違うものとに分けられる。磚で祭台を設けている例は見られない。排水溝が築かれているものが5基あり、甬道または墓室の壁面に長方形の龕が築かれているものが13基ある。甬道の外に磚で擋土牆が築かれている例に株洲東晋墓〔文献12〕（附表の湖南省32）がある。

墓磚は銘文が入ったものと幾何・銅銭の紋様で飾られたものがある。瀏陽姚家園西晋太康八年墓

M1 (287年)〔文献13〕〈附表の湖南省1〉の墓磚には“太康八年起”の銘文を持つものと三角・折角・十字・X形の幾何紋や円弧・銅銭・車輪の紋様を持つものがある。長沙西晋永寧二年墓M21 (302年)〔文献11〕〈附表の湖南省2〉の墓磚には“永寧二年五月十日作”の銘文がある。長沙東晋寧康三年劉氏女墓M2 (375年)〔文献11〕〈附表の湖南省31〉の墓磚には“寧康三年劉氏女墓”の銘文がある。長沙南郊黄泥塘墓3〔文献10〕〈附表の湖南省5〉では墓磚の側面に幾何・銅銭の紋様が描かれている。規模としての平均値は、長さ3.87m・幅1.84m・高さ2.6mで、体積18.51m<sup>3</sup>である。

## ② 二期：劉宋 (421年) から陳末 (589年) まで

この時期のものは16基ある〈附表の湖南省34-49〉。葬制の様相に変化が見られる。墳墓類型はすべて単室墓である。階段状の羨道を有する甬道付き横穴式磚室墓が3基、甬道付きの横穴式磚室墓が6基、甬道の付かない横穴式磚室墓が5基、竪穴式土坑墓が3基ある。墓壁は、弧壁のものが8基あるのに対して直壁は7基で、弧壁墓と直壁墓が半々になっている。墓頂は全て弧頂である。何れも紋様磚を用いた裝飾墓である。

単室墓は弧長方凸形単室が8基、長方形単室が7基、長方凸形単室に後龕が附いたものが1基ある。玄室は平面が長方形で細いものが多い。甬道・玄室・耳室は、地面に大きな竪穴を掘ってから、磚で築かれたものである。甬道は横砌式で築かれており、木/石門は設けられていない。甬道の外に磚で擋土牆を設けている例も見られない。甬道は大体1-2mで、2m以上のものがあるのは3基、最長は2.2mになり、1m以下のものは1例のみで0.6mである。また、棺床も引き続き築かれており、7基にあり、幅は墓室の幅とは異なっている。二期に入って祭台が出現しており、長沙黄土嶺六朝墓〔文献14〕〈附表の湖南省39〉では、棺床の前後に1つずつ築かれている。排水溝が築かれている墳墓は3基ある。

注目すべきは、多数の長方龕が玄室の壁面に密集して築かれる(“窓格”)ようになったことである。長沙齊永元元年墓(M1)〔文献15〕〈附表の湖南省36〉と長沙齊永元元年劉氏墓(M2)〔文献15〕〈附表の湖南省37〉では玄室の両側壁に長方龕が3つずつ築かれ、後壁に24の長方龕が密集して築かれている。長沙南朝墓(M3)〔文献11〕〈附表の湖南省40〉では後壁に26の長方龕が集まった“窓格”が築かれ、長沙南朝墓(M4)〔文献11〕〈附表の湖南省41〉では後壁に9つの長方龕が集まった“窓格”が築かれている。長沙黄土嶺六朝墓では側壁に長方龕が3つずつ築かれ、後壁に長方龕が1つ設けられている。

墓磚の紋様は一期の幾何・銅銭から纏枝卷葉花草に変わった。長沙齊永明十一年墓M13 (493年)〔文献11〕〈附表の湖南省35〉の墓磚には“齊永明十一年八月十日柱”の銘文がある。長沙齊永元元年劉氏墓M2 (499年)の墓磚には“齊永元元年己卯劉氏墓”の銘文と纏枝卷葉花草の紋様がある。長沙黄土嶺六朝墓では墓磚の四側面は連珠紋で飾られており、真中に“八出の蓮華”と卷葉花草が描かれていた。規模の平均値は、長さ3.77m、幅1.39m、高さ4.12m、体積21.59m<sup>3</sup>である。

## 2. 湖南省の長沙以外の地域

この地域には総計64基の墳墓があり〈附表の湖南省50-113〉、孫呉の初め（222年）から南朝の陳末（589年）までの時期を通じて、双室・単室の類型に属する横穴式の磚室墓もしくは堅穴式磚室墓である。これらを、墓室の平面類型と内部構造によって、さらに二期に区分した。

一期：孫呉（222年）から東晋（420年）まで

二期：蕭梁の天監四年（505年）から陳末（589年）まで

### ① 一期：孫呉（222年）から東晋（420年）まで

この時期のものは50基である〈附表の湖南省50-99〉。墳墓類型は双室か単室である。様々な型式の墳墓があるが、内訳は階段状の羨道を有する甬道付き横穴式磚室墓が2基、甬道付きの横穴式磚室墓が16基、甬道の付かない横穴式磚室墓が24基、堅穴式磚室墓が8基である。すべて直壁墓である。柳板平頂の2基と無磚頂の2基以外はすべて弧頂である。墳墓は全て紋様磚を用いた装飾墓である。

双室墓は長方形双単室並列墓で、未陽城関西晋墓（M116）〔文献16〕〈附表の湖南省55〉と資興晋墓（M545）〔文献17〕〈附表の湖南省62〉の2基のみである。単室墓48基のうち、長方形単室墓が29基、長方凸形単室墓が17基、長方形単室墓が2基である。一期における墳墓総数の圧倒的な部分を単室墓が占めている。双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。それらは、地面に大きな堅穴を掘ってから煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いたもので、斜めに下がった羨道を持たず、甬道は横砌式で木／石門は設けられておらず、甬道の外に煉瓦の擋土牆も築かれていない。

甬道は3基について判明しているのみであるが、全て2m以下である。それぞれ1.1m、1.1m、1.2mである。磚製の棺台と棺床に似た棺架を有する墳墓が4基あり、棺床の幅は墓室と同じである。煉瓦で祭台を設けている例は、未陽城関東晋墓（M236・M243）〔文献16〕〈附表の湖南省94・95〉の2基である。墓室の側壁に長方形龕が2つつ築かれているものは、資興晋墓（M458）〔文献17〕〈附表の湖南省69〉の1基だけである。墓室の側壁と後壁の周りに磚壁牆台が築かれているものが1基、未陽城関東晋墓（M282）〔文献16〕〈附表の湖南省85〉である。

墓磚は幾何・葉・網を主とする紋様であり、繩蓆紋もある。未陽城関西晋墓（M62）〔文献16〕〈附表の湖南省51〉には網格・魚・菱形・花などの紋様磚があり、未陽城関西晋墓（M234）〔文献16〕〈附表の湖南省60〉の墓磚には葉脈紋が、未陽城関東晋墓M110（380年）〔文献16〕〈附表の湖南省84〉の墓磚には“泰元五年”の銘文が入っている。未陽城関東晋墓（M168）〔文献16〕〈附表の湖南省96〉では網・葉脈紋様で、未陽城関東晋墓（M243）〔文献16〕〈附表の湖南省97〉では格・葉脈紋様である。資興の22基の晋墓〔文献17〕〈附表の湖南省62-83〉に用いられている紋様磚はすべて繩蓆紋である。この時期の規模としての平均値は、長さ3.10m、幅1.0m、高さ0.76m、体積2.36m<sup>3</sup>である。



## ② 二期：蕭梁の天監四年（505年）から陳末（589年）まで

この時期のものは、14基ある〈附表の湖南省100-113〉。葬制の様相が変化してきている。墳墓類型はほぼ単室墓に統一されており、双室墓は1基だけ、長方双凸形室縦列の未陽城関南朝墓（M176）〔文献16〕〈附表の湖南省105〉がある。階段状の羨道を有する甬道付き横穴式磚室墓が1基、甬道付きの横穴式磚室墓が7基、甬道が付かない横穴式磚室墓が2基、竪穴式磚室墓が2基、不明が2である。墓頂は、直壁墓が7基ある外は全て弧頂である。墳墓はすべて紋様磚を用いた装飾墓である。

単室墓は13基あり、そのうち長方形単室墓が5基、長方凸形単室墓が6基、長方台形単室墓が2基で、単室墓は二期における墳墓総数の圧倒的な部分を占めている。玄室は平面が細長方形である。それらは、地面に大きな竪穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いてある。甬道は横砌式で、木/石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦で擋土牆を設けている例も見られない。甬道はほとんどが不明であるが、判明しているものも2基あり、それぞれ0.4と0.8mである。また、棺床または棺架を設けるものが5基、磚製の祭台をもつものは一期より多い4基である。これらは、どれも単室に築かれているものである。排水溝が築かれたものも3基ある。

玄室の壁面に築かれていた長方龕が密築の長方龕と磚柱へと変化したことが注目される。資興梁普通元年墓M413（520年）〔文献17〕〈附表の湖南省101〉は玄室の両側壁に直櫺仮窓が6つずつ築かれ、後壁には磚柱が2つ設けられている。邵陽梁中大通二年墓M5・M6（530年）〔文献18〕〈附表の湖南省102・103〉の甬道・玄室の側壁には、それぞれ13の長方龕が密築されている。即ち、“窓格”である。未陽城関南朝墓（M176）は前室先端の両隅と後室後端の両隅と前・後室の間に磚製の半柱が築かれている。衡東城関南朝墓（M1）〔文献19〕〈附表の湖南省107〉の後壁両隅にも磚製の半柱が築かれている。

資興梁天監四年墓M474（505年）〔文献17〕〈附表の湖南省100〉では玄室の四隅にある半磚幅の平台は側壁から2つずつ墓室内に突出しており、後壁の中央には磚柱が築かれている。資興南朝墓（M337）〔文献17〕〈附表の湖南省104〉では四隅に半磚幅の平台が2つずつ側壁から突出しており、半磚幅の平台の上には小皿が置かれている。資興南朝墓（M388）〔文献17〕〈附表の湖南省108〉では半磚幅の平台が2つずつ側壁から突出しており、半磚幅の平台の上には小皿が置かれている。

墓磚は一期の幾何・葉脈・網の紋様磚から素面磚に変わっている。14基のうち10基が素面磚墓である。資興梁天監四年墓（M474）には葉脈・幾何紋様磚がある。邵陽梁中大通二年墓M5・M6にあるものは銘文磚と蓮華・魚・卷草・線などの紋様磚である。規模としての平均値は、長さ3.4m、幅1.33m、高さ0.99m、体積4.48m<sup>3</sup>である。

湖南省を総括すると、西晋の太康八年（287年）から東晋（317年-420年）を経て陳末（589年）に至るまでの期間を通じて、墓室の壁面上部に長方龕・直櫺仮窓、特に長方龕（“窓格”）が密集して築かれているのが湖南省の特徴である。また、甬道付きの横穴式磚室墓が主流であるが、甬道の

無い横穴式磚室墓もある。多室墓と双室墓から単室墓になる傾向がある。玄室はほぼ直壁で、弧頂が主である。墓室には棺床・祭台・排水溝が設けられており、紋様磚による裝飾墓である。規模は小さい。なお、長沙地区に限っては弧壁の長方凸形単室墓が多いことが注目される。しかし、長沙及びその周辺と長沙以外の地区に時期的な変化もある。

長沙及びその周辺地区（表1）では、一期（287年－420年）において墳墓総数の圧倒的な部分を単室墓が占めていて、甬道付きの横穴式磚室墓が主流である。玄室は弧壁が、墓頂は弧頂が主である。また、甬道は1－2mで、甬道の外に煉瓦の擋土牆を築いている例が1基ある。墓室には磚製の棺床があるが、磚製の祭台は無い。排水溝と長方形の龕が築かれている。墓磚は銘文の入ったものと幾何・銅錢の紋様磚がある。

二期（421年－589年）には、すべて単室墓になってきた。一期には見られなかった豎穴式土坑墓が3基ある。直壁墓も一期よりは多く、弧壁墓と直壁墓が半々になって、墓頂はすべて弧頂になってきた。また、一期にはあった、甬道の外に築かれた煉瓦の擋土牆を有する例は見られない。墓室には磚製の棺床・祭台があり、排水溝も築かれている。二期に入ると、玄室の側壁には長方龕が、後壁に密築の長方龕（即ち、“窓格”）があるものが一期の長方形龕に取って代わった。墓磚の紋様は一期の幾何・銅錢から纏枝卷葉花草に変わった。規模としての平均値は、一期は長さ3.87m、幅1.84m、高さ2.6m、体積18.51m<sup>3</sup>である。二期は少々大きくなって、長さ3.77m、幅1.39m、高さ4.12m、体積21.59m<sup>3</sup>である。

長沙以外の地区（表2）では、一期（222年－420年）において単室墓の割合が多く、50基のうち48基ある。墳墓の形式は様々ながら、横穴式磚室墓が主であり、甬道が附くものと附かないものがあるが、すべて直壁墓である。墓頂は弧頂である。甬道に木／石門は設けられていないし、甬道の外にも煉瓦の擋土牆は築かれていない。甬道は2m以下である。墓室に磚製の棺台または棺架があり、磚製の祭台を設けている例が1基あり、排水溝が築かれたものも2基ある。玄室の側壁に長方形龕が築かれている例が1基、玄室の側壁と後壁の周りに磚壁牆台が築かれているものが1基ある。墓磚は銘文の入ったものや幾何・葉・網を主とする紋様で飾られたものがあり、繩蓆紋で飾られたものもある。

二期（505年－589年）においては、ほぼ単室墓になってきた。一期には無かった豎穴式土坑墓も2基ある。すべて直壁墓・弧頂である。甬道は一期より短くなっており、すべて1m以下である。甬道には木／石門が無く、甬道の外にも磚製の擋土牆は築かれていない。棺架が5基あり、一期より磚製の祭台を設けるものが増えて、4基ある。排水溝が築かれたものが3基ある。玄室の壁面に小皿が置かれた半磚幅の平台が突出しており、窓格が築かれ、前・後室の両隅と前後室の間に磚製の半柱が築かれている。墓磚は素面磚に変わってきて、14基のうち10基は素面磚である。葉脈・幾何・蓮華・魚・卷草・線の紋様もある。規模としての平均値は、一期よりも二期の方が幾らか大きくなったことがうかがわれる。

## (二) 江西省

墓室の平面類型と内部構造を指標として、これまでに発掘された墳墓群を、南昌及びその周辺地区とそれ以外の地区とに二分した。

### 1. 江西省の南昌及びその周辺地区

この地域には総計19基の墳墓があり〈附表の江西省1-19〉、孫呉の初め(222年)から陳末(589年)までの時期を通じて、多室・双室・単室を問わず様々な種類の墳墓があるが、それらは全て甬道付きの横穴式磚室墓か甬道の無い横穴式磚室墓である。また、その全てが直壁墓である。墓頂は弧頂・前弧後弧・前穹後穹がある。墳墓は何れも紋様磚を用いた装飾墓である。

多室墓が5基、双室墓が8基あり、多室・双室墓は両方を加えると南昌における墳墓総数19基のうち13基となる。単室墓は6基あり、そのうち長方凸形単室2基、長方形単室3基、長方台形単室1基である。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。

特に、平面が長方形の墓室が甬道無しで2つ縦に連なっている双室墓、あるいは甬道無しで2つ縦に連なる双室で側室付きの墓、双室縦列がいくつか並列している多室墓などが、この地域の特徴である。そのうち、多室墓は5基、双室墓は6基である。

無甬道連接長方形双室縦列で側室付きのもの、並列の多室墓には以下の5例がある。南昌小蘭郷孫呉墓〔文献20〕〈附表の江西省3〉は長方形の前後双室縦列・前後双室の真中の“藻井”に両耳室が附いており、南昌東呉高栄墓〔文献21〕〈附表の江西省4〉と南昌火車站東晋墓(M5)〔文献22〕〈附表の江西省10〉は長方形の前後双室縦列で前室に両耳室が附いているもの、南昌火車站東晋墓(M4)〔文献22〕〈附表の江西省13〉は長方形の前後双室縦列の前室に両耳室が付き後室に後耳室が附いた墳墓で、南昌市郊劉宋墓(京墓1)〔文献23〕〈附表の江西省17〉は長方形の前後双室縦列が二つ並列で連接したものである。

無甬道連接長方形双室縦列の双室墓は次の6例。南昌市郊呉永安六年墓(263年)〔文献24〕〈附表の江西省5〉、南昌徐家坊西晋墓〔文献25〕〈附表の江西省8〉、南昌東湖区西晋呉応墓〔文献26〕〈附表の江西省11〉、南昌西湖区西晋湛千鈐墓〔文献26〕〈附表の江西省12〉、南昌市郊劉宋墓(京墓3)〔文献23〕〈附表の江西省16〉、南昌張家山第六号墓〔文献27〕〈附表の江西省18〉である。

墳墓の造り方は地面に大きな豎穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いており、斜めに下がった羨道は持っていない。甬道は横砌式で、木／石門は設けられていない。甬道の外に煉瓦で擋土牆が設けられている例は見られない。甬道は2m以下で、最長でも1.7m。1m以下のものも1基、0.8mである。また、棺床と同じ役割、つまり、玄室の後半部が高まっていて、幅も墓室と同じであるものが8基ある。また、磚製の祭台を設けているものは南昌火車站東晋墓(M5)の1基だけで、排水溝が築かれているのも南昌郊区孫呉墓都M1〔文献28〕〈附表の江西省6〉の1基だけである。

多室・双室・単室を問わず、墓室の前後室の間・前後室両端隅・後室の後壁の中央に磚柱を築いて

いるものが11基ある。また、墓室の両側壁に長方龕が築かれているものが1基、磚製の墻台が設けられているものが1基ある。

多室墓が3基ある。南昌火車站東晋墓（M5）では後室の四隅に磚で角柱が築かれ、南昌火車站東晋墓（M4）では甬道の両端隅・前後室の間・後室の後壁両角隅に磚柱が築かれ、南昌市郊劉宋墓（京墓1）では前後室の両側壁に磚製の墻台が、前後室の間・前後室の両端の隅と真中に磚製の柱が築かれている。

双室墓のうち6基には磚柱が、1基には磚の墻台が築かれている。南昌市郊吳永安六年墓は前後室の間・後室の後壁両角隅に磚製の柱が築かれ、南昌徐家坊西晋墓は前後室の四壁に磚製の墻台が、前後室の間・前後室の両端隅・後室の中央には磚製の柱が築かれている。この外にも、南昌東湖区西晋吳應墓では前後室の間・後室の後壁の両角隅と中央に、南昌西湖区西晋湛千鈐墓では前後室の間・前後室の両端隅・後室の後壁中央に、南昌市郊劉宋墓（京墓3）では前後室の間・前後室の両端隅・後室の後壁中央に、南昌張家山第六号墓では両端中間券柱前後室の間・前後室の両端隅に磚製の柱が築かれている。南昌東湖区孫吳墓（M4）〔文献29〕〈附表の江西省2〉は後室の後壁に長方龕が3つ設けられている。

単室墓は3基あり、そのうち南昌繩金塔西晋墓（304年）〔文献30〕〈附表の江西省7〉では玄室の両側壁に長方龕が、四隅に磚製の柱が築かれ、南昌東晋朱氏夫婦墓〔文献31〕〈附表の江西省14〉では玄室の四隅に磚製の柱が築かれ、南昌市郊劉宋墓（羅墓1）〔文献23〕〈附表の江西省15〉では玄室の両側壁に磚製の墻台が、四隅と後壁の中央に磚製の柱が築かれている。

墓磚は幾何・銅銭・網を主とする紋様磚である。南昌市郊吳永安六年墓（263年）には“吳永安六年八月熊西城葬”・“熊南城君小□孫墓”の銘文磚と網銭・纏枝・変形魚紋、対角の幾何紋の入った紋様磚がある。南昌郊区孫吳墓都M1の紋様磚は網銭紋で、南昌南郊西晋墓（M3）〔文献32〕〈附表の江西省9〉では対角の幾何紋、南昌東晋朱氏夫婦墓では網銭紋である。規模としての平均値は、長さ3.54m、幅2.05m、高さ2.29m、体積16.62m<sup>3</sup>である。

## 2. 江西省の南昌以外の地区

この地域には総計35基の墳墓があり〈附表の江西省20-54〉、孫吳の晩期（265年）から陳末（589年）までの時期を通じて、多室・双室・単室を問わず様々な種類の墳墓が見られる。それらは甬道付きの横穴式磚室墓か甬道の無い横穴式磚室墓のどちらかで、すべて直壁墓である。弧頂が主ではあるが、前穹後弧の墓頂を持つものも2基ある。どの墳墓も紋様磚を用いた装飾墓である。

多室墓が8基、双室墓が11基、単室墓が16基ある。単室墓の数は南昌地区より多く、半分近くを占めている。多室・双室・単室墓ともに玄室は平面が細長方形であるものが多い。長方形墓室が甬道無しで2つ縦に連なる双室墓、甬道無しで3つ縦に連なる三室墓、甬道無しで2つ縦に連なる双室墓で側室の附いたもの、甬道無しで2つ縦に連なった双室墓が並列している多室墓、の4類型は、この地

域における顕著な特徴である。

多室墓は、長方形三室縦列墓が5基、長方形双室縦列で前室に片耳室が附いた墓が1基、長方形双室縦列が二つ並列で連接した墓が1基、特に、方双凸形室縦列の前室に両耳室を配し回廊を廻らした吉水呉晋磚石墓は著しい点〔文献33〕(附表の江西省20)がある。双室墓は、長方形双室縦列墓が10基、前凸後刀形室縦列墓が1基ある。単室墓は、長方形単室墓が14基、長方凸形単室墓が2基ある。

墳墓の造り方は地面に大きな堅穴を掘ってから、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いてあり、斜めに下がった羨道は持っていない。横砌式の甬道に木門が設けられているのは、吉水呉晋磚石墓の1例だけである。甬道の外に煉瓦で擋土牆が設けられている例は見られない。甬道は大体1-3mの間で、最長のもは2.8m、1m以下の例も1基あり、0.5mである。また、棺床と同じ役割、つまり玄室の後半部が高く、幅が墓室と同じである例が14基ある。石祭案を持つのは、吉水呉晋磚石墓と吉水城郊2号西晋墓〔文献34〕(附表の江西省23)の2基である。排水溝が築かれた例は見られない。

この地区に顕著的なものとして、多室・双室・単室を問わず墓室に回廊・“藻井”を築き、墓室の前後室の間・前後室両端隅・後室の後壁の中央に磚柱が築かれており、また南昌では、墓室の両側壁に築かれていた長方龕または磚牆台が磚牆台に統一されてくる。

多室墓が8基のうち6基ある。そのうち、吉水呉晋磚石墓は前室の左右の回廊と後ろの回廊の間に穹窿頂の“藻井”を2つ築き、靖安虎山西晋墓M1・M2〔文献35〕(附表の江西省21・22)は前後室の両端隅・前中後三室の間に磚柱を築き、清江西晋墓(M9)〔文献36〕(附表の江西省25)は前後室の間に磚柱を築き、高安南朝宋齐墓〔文献37〕(附表の江西省48)は前後室の真中に磚中柱を、後室に片角柱を築き、贛県齊建武四年墓M4(497年)〔文献38〕(附表の江西省50)は甬道の前端近くにある封門の両側に磚柱を1つずつ築いている。

双室墓は11基あり、吉水城郊2号西晋墓は前後室の間・後室両角・中央に磚柱を築き、瑞昌馬頭西晋墓〔文献39〕(附表の江西省24)は前室の壁面上部の四角隅に磚台を築き、新建樂化老屋村西晋墓〔文献40〕(附表の江西省27)と清江洋湖東晋寧康二年墓(M5)〔文献41〕(附表の江西省35)と清江潭埠南朝墓(M11)〔文献42〕(附表の江西省51)は前後室の間・前後室両端隅・後室の後壁に磚柱を築き、清江西晋墓(M11)〔文献36〕(附表の江西省28)は前・後室の間に磚柱を築き、清江洋湖東晋墓(M9)〔文献41〕(附表の江西省31)は前後室の間・前室両角隅に磚柱を築き、清江洋湖東晋昇平元年墓M3(357年)〔文献41〕(附表の江西省33)は前後室の間・後室両角隅に磚柱を築き、清江洋湖東晋昇平元年墓M4(357年)〔文献41〕(附表の江西省34)と清江經樓至德二年墓(584年)〔文献43〕(附表の江西省52)は前後室の間・前後室両角隅に磚柱を築き、贛県劉宋景平年胡氏墓〔文献44〕(附表の江西省45)は前後室の間・前室と甬道両角隅に磚柱を築いている。

単室墓16基のうち4基があり、九江蔡家窪東晋墓〔文献45〕(附表の江西省44)と贛県元嘉七年胡氏墓M2(430年)〔文献46〕(附表の江西省46)は後壁の真中に磚柱を築き、清江潭埠劉宋泰始墓M3(470年)〔文献42〕(附表の江西省47)は玄室の四隅・後壁真中に磚柱を築き、靖安虎山南朝墓(M3)〔文献35〕

〈附表の江西省54〉は玄室の四隅に磚柱を築いている。

墓磚は南昌地区より紋様磚が多く、幾何・銅銭・網紋の外にも葉脈・纏枝・卷雲・弧線・蓮華などの紋様がある。靖安虎山西晋墓M1（286年）と靖安虎山西晋墓M2（288年）には葉脈・銭紋と対三角紋があり、靖安虎山西晋墓M1には“太康七年□二作□”の、靖安虎山西晋墓M2には“太康九年校尉葬□”の銘文磚がある。吉水城郊2号西晋墓は網銭紋で、新干酒廩西晋墓〔文献47〕〈附表の江西省26〉は卷雲紋、新干金鷄嶺東晋墓（M12）〔文献48〕〈附表の江西省36〉は半弧銭紋、新干金鷄嶺東晋墓（M34）〔文献48〕〈附表の江西省43〉は纏枝紋、九江蔡家窪東晋墓は斜方格・対角銭紋である。贛県劉宋景平年胡氏墓は“景平年胡”の銘文磚と網格・網銭紋の紋様磚で、贛県元嘉七年胡氏墓M2（430年）は“宋元嘉七年”・“胡氏”・“七年大歳庚午”の銘文磚と銭紋磚、清江潭埠劉宋泰始墓M3（470年）は“泰始六年聶”の銘文磚と網格紋磚、贛県齊建武四年墓M4（497年）は“齊建武四年七月”・“方建武四年”・“万凌”などの銘文磚と蓮華・銅銭紋、蓮華・葉脈紋、車輪線紋の紋様磚、清江経樓至德二年墓（584年）は“至德二年”の銘文磚と網格・車輪線紋磚である。規模としての平均値は、長さ3.77m、幅1.4m、高さ2.04m、体積10.77m<sup>3</sup>である。

江西省（表3）を総括すると、孫呉の初め（222年）から西晋（280-317年）・東晋（317-420年）を経て陳末（589年）に至るまでの間、特に平面が長方形の墓室が甬道無しで2つ縦に連なる双室墓と甬道無しで2つ縦に連なる双室に側室の附いた墓や無甬道長方形双室縦列が並列で連接した多室墓、即ち、無甬道の長方形双室縦列の双室墓・多室墓の存在と多室・双室・単室を問わず墳墓内に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築くのが、この地域の特徴である。なお、甬道付きの横穴式磚室墓が主流であるが、甬道の附いていない横穴式磚室墓も見られる。また、多室墓・双室墓を中心としたものから単室墓が主流になってゆく傾向が見受けられる。玄室は全て直壁で弧頂が主で、墓室には棺床・祭台が設けられている。墳墓は全て紋様磚による裝飾墓であり、総じて規模は小さい。また、南昌及びその周辺の地区と南昌以外の地区の間には地域的な差異が見受けられる。

南昌及びその周辺の地区では、孫呉の初め（222年）から陳末（589年）において多室・双室墓は墳墓の総数において

南昌以外の地区では、孫呉の晩期（265年）から陳末（589年）において単室墓は南昌地域より多く、半分近くある。無甬道の長方形双室縦列の双室墓と無甬道の長方形双室縦列附側室や無甬道長方形双室縦列の二つ並列連接や三室並列の多室墓が顕著である。即ち、無甬道の長方形双室縦列のような双室墓・多室墓がこの地域の特徴である。すべて直壁墓である。弧頂が主である。甬道に石門の設けられている例が1基あり、甬道の外に磚擋土牆が設けられている例は見られない。甬道は南昌地区のものより長く、1-2mである。また、玄室の後半部が前部より高く、棺床と同じである。磚製の祭台に代わり、石製の祭案が置かれているが、排水溝は見られない。注目されるものとして、多室・双室・単室に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築き、また、墓室の側壁には磚製の牆台だけが設けられてい

る。墓磚は南昌地区のものより紋様が増えてきた。幾何・銅銭・網紋の以外は銘文、葉脈・纏枝・卷雲・弧線・蓮華などの紋様が多くなってきた。規模平均は、長さ3.77m、幅1.4m、高さ2.04m、体積10.77m<sup>3</sup>である。

### 三、華南（湖南省・江西省）における墳墓形態の共通性と特異性

ここまで華南の湖南省及び江西省地域における孫呉（222年）から西晋（280年－317年）・東晋（317年－420年）を経て、陳末（589年）に至るまでの墳墓群を整理・分類した上で、その地域の墓室構造の変化を基に時期を区分した。それによって、それぞれの地区において時代とともに墳墓が変わっていった状況が明らかとなり、墳墓形態の共通性と地域に固有な特性を指摘することが可能となった。

#### 1. 華南（湖南省・江西省）における墳墓形態の共通性

第1に、すべての墳墓が、地面に大きな堅穴を掘って、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いている。その甬道は、煉瓦を横砌式に積み上げたものである。また、甬道付きの横穴磚室墓が主流であるが、甬道附の無い横穴式磚室墓もある〈附表〉。

第2に、多室墓・双室墓・単室墓の三類型のうち、単室墓が圧倒的多数を占めているという事実である。多室墓・双室墓から単室墓になる傾向がある。墓室は全体として細長い。

第3に、玄室の壁面はほぼ直壁である。墓頂は弧頂が主で、弧頂・穹窿頂・前弧後穹・前穹後弧が併存する状況から、弧頂に統一される傾向が見られる。

第4に、墓室に棺床・祭台・排水溝を設けている。玄室の側壁と後壁に長方龕または長方磚柱を築いている。

第5に、紋様磚による装飾墓である。銘文が入った磚や幾何・銅銭の簡素な紋様の入った磚で飾られた墳墓から蓮華・纏枝卷葉花草の複雑な紋様磚や人物像・僧侶・飛天・武人・龍鳳・魚・鳥・獸などの画像磚で飾られた墳墓へと展開する。

第6に、墳墓の規模は小さく、構造も概して単純である。

#### 2. 華南（湖南省・江西省）における墳墓形態の特異性

第1に、湖南省の長沙地区のみ弧壁の長方凸形単室墓が多い、墓室の壁面上部には長方龕・直樞仮窓、特に密築の長方龕（＝“窓格”）が築かれている。

第2に、江西省では、平面が長方形の墓室が甬道無しで2つ縦に連なる双室墓・甬道無しで2つ縦に連なる双室で側室が付いた墓や長方形双室縦列がいくつか並列した多室墓、即ち、無甬道の長方形双室縦列のような双室墓・多室墓が存在することである。また、多室・双室・単室に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱が築かれている点。

#### 四、時期の変遷と地域間の相違

華南の湖南省と江西省の共通性ととも、より小さな地域を単位とした差異とそれを共有する地域について考察するものである。

##### 1. 時期の変遷

###### ① 墳墓類型

湖南省では、長沙地区に西晋の太康八年から東晋にかけて多室・双室・単室の三類型が共存しているが、劉宋以後には単室墓に統一されてくる。長沙以外の地区では、孫呉から陳に至るまではほぼ単室墓であり、双室墓は64基のうち3基しかない。

江西省では、孫呉から陳まで多室・双室墓が主流になって墳墓総数の圧倒的な部分を占めている。

###### ② 墳墓構造

魏晋南北朝期に入ると墓槨が消え、墳墓はすべて墓室構造となった。それらはほぼ横穴式の磚室墓で、主流となるのは甬道付きの横穴式磚室墓と甬道の無い横穴式磚室墓である。この外には、斜めに下がった羨道（斜坡羨道）を有する横穴式磚室墓・階段状の羨道を有する横穴式磚室墓・堅穴式磚室墓・堅穴式土坑墓が少数ながら併存している。墓壁は直壁が主であるが、湖南の長沙地区だけは弧壁墓が多い。また、墓頂は弧頂・穹窿頂・前弧後穹・前穹後弧が併存する状況から、弧頂に統一される傾向が見られる。多くの場合、玄室には棺床が築かれているが、祭台が築かれている例はあまり多くない。装飾墓は、銘文が入った磚や幾何・銅銭の簡素な紋様の入った磚で飾られた墳墓から蓮華・纏枝卷葉花草の複雑な紋様磚や人物像・僧侶・飛天・武人・龍鳳・魚・鳥・獸などの画像磚で飾られた墳墓へと展開する。また、規模の平均は長さ3—4 m、幅1—2 m、高さ0.8—4 mで、あまり大きくない。

墳墓の造り方は地面に大きな堅穴を掘って、煉瓦で甬道・玄室・耳室を築いている。甬道は煉瓦の横砌式であるが、甬道の外または甬道と墓室の外側両端に擋土牆が築かれているもの・墓室に排水溝が築かれ、さらに玄室の両側壁と後壁に長方龕または長方磚柱が築かれていることは、中国古代の埋葬制度において画期的なことであり、墳墓における伝統的な内部施設と訣別した、新たなスタイルの誕生は、当時の社会情勢が劇的な変化をしたことを窺わせる。この墓制は南方地区にも広がって、盛んに行われていく。また、各省では、時期的或は地域的な変化もある。

湖南省の長沙及びその周辺地区では、一期（287年—420年）においても単室墓が圧倒的多数を占めていたが、二期（421年—589年）に入ると、すべて単室墓になってきた。甬道付きの横穴式磚室墓が主であるが、一期には見られなかった堅穴式の土坑墓が3基ある。玄室の墓壁は弧壁が主流である状況から弧壁と直壁が半々となり、墓頂はすべて弧頂になった。また、一期には甬道の外に築か



れていた煉瓦の擋土牆が、二期に入って見られなくなった。一期には長方形龕が築かれるだけであったが、二期に入ると、側壁に長方龕が築かれると同時に、後壁には長方龕が密集して築かれるようになる(=“窓格”)。墓磚の紋様は一期の幾何・銅銭から二期の纏枝卷葉花草に変わる。規模の平均値は、一期は長さ3.87m、幅1.84m、高さ2.6m、体積18.51m<sup>3</sup>であるが、二期には多少大きくなって、長さ3.77m、幅1.39m、高さ4.12m、体積21.59m<sup>3</sup>である。

湖南省の長沙以外の地区では、単室墓の占める割合が比較的大きかった一期(222年-420年)から二期(505年-589年)に入ると、ほぼ単室墓に統一されてくる。なお、一期には見られなかった堅穴式の土坑墓も2基ある。甬道は一期よりも短くなっており、すべて1m以下である。磚製の祭台が築かれた例も一期より多く4基が見つかっている。また、新しい要素が二期に入って出現する。一期に長方龕が築かれていた墓壁には長方龕が密集して築かれ、“窓格”になった。玄室の壁面から突出した半磚幅の平台には小皿が置かれており、前・後室の両隅と前・後室の間には磚製の半柱が築かれている。墓磚は二期に入って素面磚に変わり、14基のうち10基が素面磚で築かれている。なお、葉脈・幾何・蓮華・魚・卷草・線の紋様磚が残りの4基で用いられている。規模としての平均値は、一期が長さ3.10m、幅1.0m、高さ0.76m、体積2.36m<sup>3</sup>なのに対して、二期では少々大きくなって、長さ3.40m、幅1.33m、高さ0.99m、体積4.48m<sup>3</sup>となっている。

江西省を、南昌及びその周辺地区と南昌以外地区に二分した。両者に共通していることは、無甬道の長方形双室縦列のような双室墓・多室墓が存在することと、多室・双室・単室を問わず煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱が築かれているということである。単室墓が南昌地区より多く、墳墓総数の半分近くを占めている。また、甬道に石門が設けられている例が1基ある。甬道は南昌地区のものより長く、1-2mある。南昌地区で見られる磚製の祭台の代わりに石製の祭案が置かれていて、排水溝は無い。墓磚は南昌地区より紋様が増えてきた。幾何・銅銭・網紋の以外は銘文、葉脈・纏枝・卷雲・弧線・蓮華などの紋様が多くなってきた。規模は少々小さくなってあまり変わっていない。規模の平均は、南昌地区は長さ3.54m、幅2.05m、高さ2.29m、体積16.62m<sup>3</sup>で、南昌以外の地区は長さ3.77m、幅1.4m、高さ2.04m、体積10.77m<sup>3</sup>である。

## 2. 地域間の相違

- ① 装飾墓：孫呉の初め(222年)から陳末(589年)にかけて銘文磚と紋様磚で飾られた墳墓が盛んに造られている。
- ② 湖南省では、多室・双室・単室を問わず弧壁墓が卓越している。113基のうち直壁墓はわずか33基に過ぎない。その点では、殆どが直壁墓である他処の状況とは明らかに異なった様相を見せている。

江西省で前室と前後室間無甬道縦列の双室墓が見られる点は注目される。

- ③ 湖南省では墓壁に長方龕が密集したもの、即ち“窓格”を設けているのが目を引く。また湖南省の長沙以外の地区では、棺床そのものではないが、棺を支えるという棺床と同様の機能をもった“棺架”というものが見られる。それは他処では見られないものである。江西省では多室・双室・単室に煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築いてあるものが注目される。

### 3. 文化地域間の波及と受容

湖南省・江西省の武漢を中心とした地域は、南京を中心とした浙江省・福建省地域とともに、長江流域の中心部から離れた地ではあったが、西晋王朝の滅亡に始まる諸民族の大移動によって中心地域からの様々な影響を受けることになった。その一方で、土着の文化的伝統を基にした強固な地域性をも保持し続けたのであった。

例えば、湖南省における階段羨道横穴式磚室墓・密集して築かれた長方龕、長沙地区の弧壁墓や長沙以外の地区の棺架がそれに当たる。江西省においては前室と前後室間無甬道縦列の双室墓や多室・双室・単室のそれぞれに煉瓦で端柱・間柱・角柱・中柱を築いていることである。

#### 小 結

ここまで、魏晉南北朝における華南の湖南省及び江西省地域の墳墓について時間的な変化と地域の差異を基にして具体的に検討してきた。その結果、大規模かつ豪華な墓作りに熱心であった後漢とは異なり、この時期には、構造が簡単で規模もささやかなものに変ったことが明らかになった。その背景には、当時の人々の墓葬に対する意識に大きな変化があったことが推量される。このような墓葬制度の急激な変革に伴う思想的・イデオロギー的背景を明らかにすることが必要と思われる。

魏晉南北朝期において、仏教弘布に伴って新しい思想・文化・意識形態が到来したことや、激しい政権交替・恒常的な民族移動が誘因となって騎馬民族などの習俗が取り込まれたことなど、いくつかの要因が想起されるが、その具体的な解明は後稿に譲ることとする。

注：相応する訳語の見当たらない術語については、取りあえず中国における表現をそのまま用いた。

【参考文献】

- (1) 葉曉軍「中国墓葬發展史」甘肅文化出版社 1994年
- (2) 馮普仁「南朝墓葬的類型與分期」『考古』1985年3期
- (3) 蔣贊初「長江中游六朝墓葬的分期和斷代」『中国考古学会第三次年会論文集』文物出版社 1984年
- (4) 楊泓「三国考古的新發現」『文物』1986年3期
- (5) 姚仲源「浙江漢、六朝古墓概述」中国考古学会編『中国考古学会年会論文集』(1981年)
- (6) 曾凡「關於福建六朝墓的一些問題」『考古』1994年5期
- (7) 林忠干・林存琪・陳子文「福建六朝墓初論」『福建文博』1987年2期
- (8) 安郷県文物管理所「湖南安郷西晋劉弘墓」『文物』1993年11期
- (9) 湖南省文管会李正光「長沙北門桂花園發現晋墓」『文物』1955年11期
- (10) 湖南省博物館「長沙南郊的兩晋南朝隋代墓葬」『考古』1965年5期
- (11) 湖南省博物館「長沙兩晋南朝隋墓發掘報告」『考古學報』1959年3期
- (12) 湖南省博物館「醴陵、株洲發現漢晋墓葬」『湖南考古輯刊』第3集(1986年)
- (13) 高至喜「瀏陽姚家園清理晋墓二座」『文物』1960年4期
- (14) 周世榮「長沙黄土嶺發現六朝墓」『考古通訊』1957年4期
- (15) 湖南省文物管理委員會「長沙瀾泥冲齊代磚室墓清理簡報」『文物』1957年12期
- (16) 衡陽市文物工作隊「湖南未陽城関六朝唐宋墓」『考古學報』1996年2期
- (17) 湖南省博物館「湖南資興晋朝墓」『考古學報』1984年3期
- (18) 邵陽市文物局「湖南邵陽南朝紀年磚室墓」『文物』2001年2期
- (19) 衡陽市文物工作隊・衡陽県文物管理所「湖南衡東城関南朝墓清理簡報」『江漢考古』1992年2期
- (20) 南昌県博物館「江西南昌県發現三国吳墓」『考古』1993年1期
- (21) 江西省歷史博物館「江西南昌市東吳高榮墓的發掘」『考古』1980年3期
- (22) 江西省文物考古研究所・南昌市博物館「南昌火車站東晋墓葬群發掘簡報」『文物』2001年2期
- (23) 江西省博物館考古隊「江西南昌市郊南朝墓發掘簡報」『考古』1962年4期
- (24) 秦光杰「江西南昌市郊吳永安六年墓」『考古』1965年5期
- (25) 江西省文物管理委員會「江西南昌徐家坊六朝墓清理簡報」『考古』1965年9期
- (26) 江西省博物館「江西南昌晋墓」『考古』1974年6期
- (27) 江西省文物管理委員會「江西的漢墓與六朝墓葬」『考古學報』1957年1期
- (28) 江西省博物館「江西南昌東漢、東吳墓」『考古』1978年3期
- (29) 唐昌朴「江西南昌東吳墓清理簡記」『考古』1983年10期
- (30) 江西省博物館「江西南昌市郊的兩座晋墓」『考古』1981年6期
- (31) 陳定榮・許智范「南昌市区清理一座東晋墓」『考古』1984年4期

- 32 江西省博物館「江西南昌市南郊漢六朝墓清理簡報」『考古』1966年3期
- 33 李希朗「江西吉水晋代磚室墓」『南方文物』1994年3期
- 34 江西省文物考古研究所・吉水縣博物館「江西吉水城郊2号西晋墓」『文物』2001年2期
- 35 江西省文物工作隊「江西靖安虎山西晋、南朝墓」『考古』1987年6期
- 36 江西省博物館考古隊「江西清江晋墓」『考古』1962年4期
- 37 高安縣博物館「江西高安清理一座南朝墓」『考古』1985年9期
- 38 贛州市博物館「江西贛南齊墓」『考古』1984年4期
- 39 江西省博物館「江西瑞昌馬頭西晋墓」『考古』1974年1期
- 40 余家棟「江西新建清理兩座晋墓」『文物』1975年3期
- 41 江西省文物管理委員會「江西清江洋湖晋墓和南朝墓」『考古』1965年4期
- 42 江西省博物館考古隊「江西清江南朝墓」『考古』1962年4期
- 43 清江縣博物館「江西清江經樓南朝紀年墓」『文物』1987年4期
- 44 贛州地区博物館・贛縣博物館「江西贛南朝宋墓」『考古』1990年5期
- 45 九江縣文物保護管理所「江西九江縣清理一座東晋墓」『江西文物』1990年1期
- 46 贛縣博物館・賴斯清「江西贛南朝宋墓的清理」『考古』1996年1期
- 47 江西省文物工作隊・新干縣文物陳列室「江西新干縣西晋墓」『考古』1983年12期
- 48 江西省文物管理委員會「江西新干金鷄嶺晋墓南朝墓」『考古』1966年2期



Table with columns for site number, location, date, and other details. The table lists numerous archaeological sites in Hunan and Jiangxi provinces, such as '55 耒陽城關西晉墓(M116)', '56 耒陽城關西晉墓(M83)', etc., up to '113 耒陽城關前朝墓(M248)'. Each entry includes a site number, location, date, and various classification codes.

222-280年: 孫吳 280-317年: 西晉 317-326年: 西晉末年 326-420年: 東晉 421-479年: 劉宋 502-557年: 梁 421-589年: 南朝



表1 湖南省長沙地区の墳墓編年一覽

時期	種類	形式	墓壁	墓頂	封門	棺床	祭台	排水溝	墓壁面	裝飾	規模(平均値)
一期 287年-420年 33基	斜坡墓道槨穴 1基	多室 2基	直壁 9基	弧頂 11基	木(石)門 無	磚棺床 15基 (同幅・非同幅)	磚祭台 無	排水溝 5基	墓壁に長方竇を築く 13基	銘文と幾何・綉紋	387 × 184 × 26 = 1851
	階段墓道槨穴 1基	双室 3基	弧壁 23基	穹窿頂 3基	構土牆 1基						
	甬道槨穴 27基	單室 28基		前穹後穹 3基	甬道は1-2m 最長2.5m						
二期 421年-589年 16基	槨穴 1基			椽 15基							
	豎穴 3基			残 1基							
	階段墓道槨穴 3基	全て單室	直壁 7基 弧壁 8基	全て弧頂	木(石)門 無 構土牆 無 甬道は1-2m 最長2.2m	磚棺床 7基 (非同幅)	磚祭台 1基 磚棺床の前後廻りに1つずつ	排水溝 3基	墓壁に長方竇と密葉の長方竇(窓格) 1基 長方竇 1基 竇と窓格 4基	銘文と纏枝卷 葉花草	3.77 × 1.39 × 4.12 = 2159

表2 湖南省長沙以外地区の墳墓編年一覽

時期	種類	形式	墓壁	墓頂	封門	棺床	祭台	排水溝	墓壁面	裝飾	規模(平均値)
一期 222年-420年 50基	階段墓道槨穴 2基	双室 2基	全て直壁	柳椽平頂 2基	木(石)門 無				墓壁に長方竇を築く 1基	銘文と幾何・葉・綉・絹文も有る	3.10 × 1.0 × 0.76 = 2.36
	甬道槨穴 16基	單室 48基		無磚頂 2基	構土牆 無	磚棺架 4基	磚祭台 1基	排水溝 2基	三壁に磚壁構台を築く 1基		
	槨穴 24基			弧頂 46基	甬道は2m以下 最長1.2m						
二期 505年-589年 14基	階段墓道槨穴 1基	双室 1基	全て直壁	全て弧頂	木(石)門 無	磚棺架 5基	磚祭台 4基	排水溝 3基	纏窓・柱 1基 窓格 2基 半磚平台 2基 磚壁半柱 2基	素面磚が主、14基のうち10基ある。 銘文と幾何・葉・蓮華・魚・卷葉も有る	3.40 × 1.33 × 0.99 = 4.48
	甬道槨穴 7基	單室 13基			構土牆 無						
	槨穴 2基				甬道は1m以下 2基						

表3 江西省南昌と南昌以外地区の墳墓編年一覽

地区	種類	形式	墓壁	墓頂	封門	棺床	祭台	排水溝	墓壁面	裝飾	規模(平均値)
南昌及び周辺 222年-589年 19基	甬道槨穴 8基	多室 5基	全て直壁	弧頂 8基	木(石)門 無	後高 (磚棺床)	磚祭台 1基	排水溝 1基	墓壁に長方竇を築く 1基	銘文と幾何・綉紋	3.54 × 2.05 × 2.29 = 16.62
	槨穴 11基	双室 8基		前弧後弧 5基	構土牆 無	8基 (同幅)			磚構台 1基		
	甬道 6基	單室 6基		前穹後穹 1基	甬道は2m以下、最長1.7m				磚柱 11基		
南昌以外 285年-589年 35基	甬道槨穴 8基	多室 8基	全て直壁	ほぼ弧頂 2基	石門 1基	後高 (磚棺床)	石祭案 2基	排水溝 無	回廊間に竇井を築く 1基	銘文と幾何・綉・網・纏枝卷 葉花草・蓮華・弧線	3.77 × 1.40 × 2.04 = 10.77
	甬道槨穴 2基	双室 11基		前穹後穹 2基	構土牆 無	14基 (同幅)			磚構台 1基		
	槨穴 25基	單室 16基			甬道は1-3m 最長2.8m				磚柱 19基		